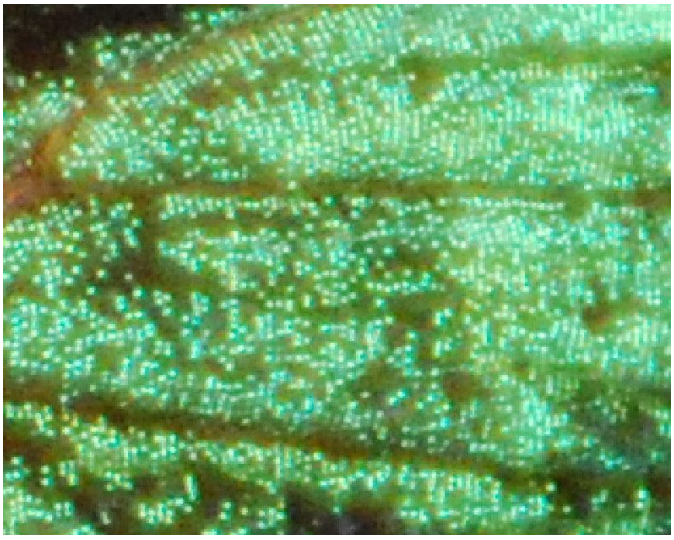
「日々の理科」（第 1666 号） 2019（H31),-1,30

# 「ミドリシジミの標本（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

ミドリシジミは名の通り翅は緑色（光線の具合によっては青）に見えるが、それは翅そのものが緑色なのではなく、翅を覆っている「鱗粉」がそう見せているのである。

野外の生きた個体では、細部まで観察できないが、標本なら近寄って観察できる。私は、翅の緑色に見える部分を接写撮影してみた。テレビのブラウン管のように、緑に光る粒が並んでいる。この一粒一粒が鱗粉なのだろう。



フラッシュをたいて撮影すると、鱗粉が一層輝いて見える。夜間飛行中の航空機から、夜の大都市を眺めているように見える。

チョウやガの翅は、左右に２枚ずつ、合計４枚ある。頭に近い方を「前翅（ぜんし)」、尾に近いほうを「後翅（こうし)」という。翅を開いて、背中側から見たほうが「翅の表」である。ガは翅を開いて、壁や樹皮などで休む種類が多い。これを「静止姿勢」といい、この場合、「翅の表」をよく観察できる。

チョウの仲間には、翅を閉じて休む種類も多い。写真は「ウラジャノメ」が壁で休んでいるところだ。この場合「翅の裏」が見えていることになる。「ウラジャノメ（裏蛇の目)」の名の通り、翅の裏側に見事な「眼状紋」が見られる。(北軽井沢)

ところがミドリシジミの場合、翅の裏側（腹側）は実に地味だ。標本を裏返しにして撮影した。薄褐色で白い筋があるだけで、ガと見間違えそうな色合いである。翅の裏だけを見たのでは、ミドリシジミの魅力は全く理解できない。しかし、この地味な翅の裏の微妙な紋様が、種の同定に非常に役立つらしい。